

ラテン教父の総合研究

アフリカの司教殉教者キプリアヌス（5）

『善行と施しについて』——翻訳と注解——

Cyprianus, *De Opere et Eleemosynis*.*

吉 田 聖

1. 著者キプリアヌスと当時の社会状況

アフリカのキプリアヌス(200-258)がカルタゴの司教になったのは、248年(48歳)頃であった。それ以後、258年に殉教するまでの約10年間には、デキウス帝(249-251在位)のキリスト教弾圧と大迫害に直面し、一時職務を果たせなくなって安全な場所へ身を隠したこともあったが、その後の混乱した社会と教会情勢の中で、「教会の一致」を説き(251年。拙訳『カトリック教会の一致について』, 南山神学, 第8号参照), 「背教者の復帰問題」

* Cyprianus, *De Opere et Eleemosynis* は13種類の写本(7世紀より12世紀に至るもの)があり、この題名についても上記(写本略号F, R)の他に、*De Opere et Eleemosynis* (写本略号W, P)とか、*De Opere et Aelemosine* (写本略号G)、*De Opere et Aelymosina* (写本略号Y)とか、綴り方に多少の差異が認められる。本書の題名として以前に、『労働と施しについて』としたが〔南山神学, 第9号参照〕, 今回の詳細な内容検討により、よりの確な訳を考えて『善行と施しについて』と改めることにした。ちなみに、英訳: *On Works and Alms*, 独訳: *Ueber gute Werke und Almosen* となっている(参考文献については、南山神学, 上掲号参照)。なお新共同訳(1987)の完成により、本稿より、聖書の訳文・略語・人名等は新共同訳を使用することにした。ただし、キプリアヌス時代のイタラ・ラテン語版聖書の文章をはじめ、彼独特の文章表現の場合、彼の使用したラテン語原文に則して新共同訳とは異なる私訳を試み、本文または脚注で言及することにした。

に関しては和解の可能性を示唆し(251年。拙訳『背教者について』, 同10号参照), 「主の祈り」による(251-252年。拙訳『主の祈りについて』, 同11号参照)教会の一致和合と信仰の大切さを力強く続けた。彼のユニークな指導方法は、直接司牧が出来ない状態でも、書簡や司牧的文書をもってキリスト者を激励し続けたことである。ヴァレリアヌス帝(253-260在位)の迫害の時、追放され、約1年後の258年9月14日斬首刑を受け、アフリカの最初の司教殉教者となったのである〔なお、彼の生涯や殉教の模様、参考文献等、詳細については、前掲の『南山神学』(第9号)を参照されたい〕。

2. キプリアヌスの著作 *De Opere et Eleemosynis* について

彼の著作は論文13, 書簡81通が残っているが、今回はその中から、特に現代の私達にとって有益な教えが含まれている、*De Opere et Eleemosynis* を選んで、『善行と施しについて』という題名のもとに翻訳し、キリスト者の実行を促す彼の意気込みの一端を紹介してみたいと思う。というのも、彼の教えによれば(そして、それは教会の教えと伝統を踏まえたものであるが)善行・慈善・施し・憐れみ等の言葉で表現される「愛のわざ」こそは、キリスト者にとって極めて大切なもので、しかも各人の救いにも大きな影響をおよぼす実践的な課題なのである。

度重なる迫害と略奪・荒廃のためにアフリカの人々は苦しい状態に陥り、困窮と欠乏による貧困が人々を不幸のどん底に落とし入れていた。貧しい人々は金持ちから搾取され抑圧されて、ますます貧しくなっていくしかなかった〔こうして見てくると、昔も今も、アフリカの状態は、苦しいことに変わりはないようだ。〕

前述のデキウス帝の激しい迫害終息後の252年頃に、そのような困窮状態にいち早く気付いたキプリアヌスは、この *De Opere et Eleemosynis* を書いたらしい(255年頃とする説もあるが、そうだとすれば、ヴァレリアヌ

ス帝の迫害のさなかということになる)。彼はこの本の中で、全部で26章を使って、旧約聖書をはじめ新約聖書の言葉や模範を巧みに取り入れ紹介しながら、「愛のわざ」の実践が救いのために役立つばかりでなく、必要であることを理路整然と説いている。同時に貧しい人々を助けるように具体的な勧めと励ましを与えている。その口調は時には優しく、時にはとても厳しいものがある。不思議なことに、この著作ではいつもの呼び掛けの言葉「愛する兄弟達よ」という2人称複数形〔第1,3,4,6,16,21,23,24,25,26の各章の冒頭に合計10回登場する〕の他に、途中で「あなた」という2人称単数形が頻繁に用いられている〔第9,10,11,12,13,14,15,16,18,19,20章の合計11章中に使用されている〕。2人称単数で語りかけられると、慈父のような親近感を覚えるのと同時に、直接自分に宛て言われたような緊張感や迫力を感じさせる効果もあるようだ。(ただし、翻訳の際に日本語の感覚としては、あまり「あなたは・・・」「あなたに・・・」「あなたを・・・」等を連発すると煩雑で、少々違和感もあるので、極力少なめにした)

3. *De Opere et Eleemosynis* 『善行と施しについて』の構成

今回使用したラテン語の原文は、*Corpus Christianorum Series Latina: Sancti Cypriani Episcopi Opera Pars II*, 1976, ed. M. Simonetti.(pp.53-72)である。前述のように、全体は26章からなっているが原文には目次や各章の小見出しが何もついていないので、内容を検討しながら小見出しをつけ、上述の2人称単数形を続けて使用している部分を「本論」と見做し、その前と後を「序論」と「結論」という形にまとめてみた。

第1部 序論：神の救いの計画と善行や施しの意義。

1. 神の救いの計画と、善行や施しの果たす役割。
2. 洗礼の恵みと、善行や施しによる罪の清め。
3. 人間の有罪性と、その治療法としての善行や施し。
4. 神の呼び掛けとしての、善行や施しの重要性の強調。

5. 神の御怒りを和らげる方法：旧約聖書の数件の模範より。
6. 施しによって生き返った新約聖書のタビタの例。
7. 天に富を積むことの大切さ。
8. 神を敬う人は貧しい人々にも憐れみの心を持つ。

第2部 本論（ここでは17章を除き、各章に2人称単数形を使用）

9. 寛大な施しに伴う不安や心配。
10. その心配のもたらす悪い結果。
11. 善行に励む者に対する神の配慮。
12. 神に信頼することと不信仰者の姿。
13. 自分の富に執着する愚かさ。
14. 金持ちの人への具体的な勧め。
15. 貧しいやもめの献金の模範。
16. 貧しい人への施しの優先を。
17. 預言者エリヤを助けた婦人の模範と彼女の受けた報い。
18. 子沢山な父親の心配に対して。
19. 神こそ真の父親，真の保護者。
20. 父トビアの模範とその勧告。

第3部 結論

21. 施しと永遠の報いとの関係。
22. 滅びに至る人々への警告。
23. 最後の審判の基準は善行の有無。
24. 時間があるうちに善行に励め。
25. 初代教会の共有財産と信仰の熱意のあらわれ。
26. 慈善に励む者の受ける報いと実践への励まし。

4. Eleemosyna (施し) に関する聖書の教えと初代教会の実践

キプリアヌスの著作全体を通して、この *eleemosyna* という単語は55回

使用されている（5回：DM；1回：LA；33回：OP；15回：Q3；1回：ZE）。この『善行と施しについて』では33回も使用されているわけだが、これは、聖書の教えと初代教会よりの実践を忠実に反映したものである。ここで、レオン デュフル編の『聖書思想辞典』の「施し」の項より抜粋して、用語の意味と内容の両面からみていくことにする。

1) 旧約聖書：ヘブライ語には、施しを意味する特別の言葉はない。70人訳聖書がつかっているギリシャ語：*ἐλεημοσύνη*〔ラテン語ではそのまま受け継いで、*eleemosyna*, ae. f.〕は①人間が他の人間に示す好意(創47, 29)のほかに、②神の慈悲(恵みを施す義：詩24, 5；イザ59, 26)とか、③まれには神に対する人間の誠実な応答である義(申6, 25)をもさす語である。人間同士が互いに抱く憐れみは、それが行為に表れない限り本当のものではない。このような行為のなかで重要な位置を占めているのが、必要に迫られている人々を物質的に助ける「施し」である。

新約聖書になると上記のギリシャ語は、この「施し」という意味に限定されるが、この傾向は、すでに旧約聖書のなかでも時代的に新しいダニエル書・トビト書・シラ書などのなかに認められる。ここでは、まだ人間に対する神の慈悲という意味で使用されている(ダ=9, 16；トビ3, 2；シラ16, 14；17, 29)。これらの経緯は、人間が兄弟に対して示す慈愛の行為である施しは、なによりもまず、みずから進んで人間に慈愛を示した神の行為の模倣であることを示唆しているといえよう。

律法に記された施しの規定のなかには、①「刈り入れのときに麦の落穂を残し、ぶどうの取り入れのときにその実を取り尽くさないで残しておく義務」(レビ19, 9；23, 22；申24, 20-21；ルツ2)、②「3年ごとに産物の10分の1を、レビ人・寄留者・孤児・寡婦のように自分の土地を持っていない人々のために蓄えて施す義務」(申14, 28-29；トビ1, 8)などがある。

この施しは、単なる博愛の業ではなく、宗教行為となるべきである。貧しい者への施しは、たびたび特別な祭儀と結ばれており、祝祭の一部とも

なっている。この行為に価値があったのは、結局それは神自身に対して行う業であり、そこから報いと罪の赦しを受ける資格が得られたからである。施しは、神に捧げるいけにえに等しい（シラ 35, 2）。

2) **新約聖書**：施しは新約の新しい宗教生活の段階のなかで新しい意味が与えられている。イエズスは施しを断食や祈りとともに、宗教生活の3大支柱の一つに数えている（マタ 6, 1-18）。イエズスは施しを勧めるとき、それが完全な無私無欲の心で、見せびらかすことなく、返してもらうことを考えずに（ルカ 6, 35 他）、無制限に（同 6, 30）なされることを要求する。

施しがこれほど根本的な義務である理由は、それがキリストに対する信仰を表明するものだからである。施しは、天における報いの源であり、施しでつくった友のおかげで天に宝を積む、というユダヤ人の教えをキリストも支持しているが、これは利を重んじる打算によるものではない。不幸な兄弟にする施しは、イエズス自身に対して行う業にほかならないのである。

3) **初代教会よりの実践**：社会において貧困状態が根絶されても、それは必ずしも神の国の福音が宣布されたことを意味するものではない。従って、施しを命ずる福音の教えを全うするために、つねに無償の施しをする必要がある。他方、「取り去られた花婿」（マタ 9, 15）なるキリストと一致するためにも、隣人を助けねばならない。兄弟が困っているのを見て、憐れみの心を閉じる人のなかには、神の愛は住みえない（I ヨハ 3, 17 他）。自分の持ち物を兄弟と分け合うことなしに、聖体祭儀の交わりの秘跡にあづかることはできない（I コリ 11, 20-21）。施しはもっと広い意味もっており、教会間の一致をもたらすことができる。パウロはそのため、エルサレムの母教会のために義援金を募るとき、この施しの行為を「聖なる奉仕」（*diakonia*： II コリ 8, 4；9, 1, 12-23；*leitourgia*：同 9, 12）と呼んでいる。彼はまた、情熱をこめて真の施しに関する説教をする（II コリ 8-9 章）。キリストの寛大さに倣って、兄弟間の差をなくすように努めなければ

ならない。神が養美されるように、豊かに蒔かなければならない。「神は喜んで施す者を愛する」(同9, 7)からである。

(以上、『聖書思想辞典』参照)

5. キプリアヌス『善行と施しについて』——翻訳と注解——

1. 愛する兄弟たちよ、神の恵みは豊かで偉大なものです。私達の救いのために、父である神とキリストの寛大にして豊かな憐れみが、かつて与えられ、今も与えられているからです。御父は私達を守り生命を与えるために、また御子によって私達を〔元の状態に〕修復するために御子を遣わされました。御子は私達を「神の子」とするために、自らは「人の子」となることをお望みになって〔この世に〕遣わされたのです。即ち、これまで倒れていた人々を起き上がらせるために自らはへりくだり、私達の傷を癒すために自らは傷つけられ、奴隷状態にあった人間を「自由な状態」へ引き上げるために自らは奴隷のように仕え、死すべき人間に「不死」を与えるために自らは死を耐え忍ばれたのです。神の憐れみはこれほど豊かで偉大な賜物なのです！

しかしながら、既に〔罪から〕購われた人間であるのに、神の御保護に守られ、救いの計画によって、私達のためにより一層の配慮がなされているのです。これは何という御摂理でしょう！ どれほど豊かな寛大さなのでしょう！ というのも、アダムが負うていたあの傷、蛇による「古傷」(神に背く罪)を主御自身が〔この世に〕来られて癒して下さった時、一つの掟を彼に与えられました。それは、これ以上罪を犯さないように命じ、また罪を犯してもこれ以上悪いことが起こらないようにするためでした。

私達は既に制約を受け、無罪の掟によって、狭い場所に閉じ込められていたのです。神〔の御慈悲〕がもう一度、正義と憐れみのわざを示すことによって、救いに至る道を開かない限り、人間の弱さや欠点はどうしようもないのです。そうしてこそ、かつて身に滲み付いてしまっていた「汚れ」

も、「施し⁽¹⁾」によって洗い落とすことが出来るのです。

2. 聖霊は聖書の中でこう語っています：「施しと信仰によって、罪は清められる」⁽²⁾。しかしながら、以前に犯されたあの罪〔原罪〕はそうではありません。原罪はキリストの御血と聖化の恵みによって清められるからです。再度、聖霊はこう述べています：「水が燃え盛る火を消すように、施しの業は、罪を消す」⁽³⁾。即ち、救いの水の器〔洗礼〕によってゲヘナの火〔地獄の罰〕が消されるのと同じように、施しと正しい行いによって罪の炎が消されるということが、ここにも示され証明されています。洗礼によって罪のゆるしが一度与えられますが、洗礼と同じように、絶え間なく無尺蔵になされる〔施しの〕業も、神のゆるしをもたらすのです。このことを主も福音書の中で教えておられます。弟子達が手を洗わずに食事をしたと非難されたとき、主は答えてこう言われました：「外側を造られた神は、内側もお造りになったのではないか。ただ〔器の中にある物〕を人に施せ。そうすれば、あなたたちにはすべてのものが清くなる」⁽⁴⁾。ここで主が説きあかしたことは、つまり、洗い清めるべきものは手ではなく心であり、除去されるべきものは外側の汚れではなく内側の汚れである、という

(1) この数行中に、本書のテーマが別な言い方で分かり易く表現されているようだ。 *iustitiae et misericordiae operibus . . . et eleemosynis* 「正義と憐れみのわざと . . . 施しによって」、つまり善行・慈善・施し等の愛の業に励むことによって、救いの恵みに与かることが出来ること、そのため励むべきこと。本書の基本的な主張点である。

(2) 箴 15, 27 a と原文脚注にあるが、該当箇所ではない。意味からして、箴 16, 6 あたりが該当する。新共同訳では「慈しみとまことは罪を購う」となっているが、あえて「施しと信仰によって、罪は清められる」とキプリアヌスのラテン文にそって訳出した。

(3) シラ 3, 10 「 . . . 罪を償う」はキプリアヌスの原文では *extinguit* で「罪を消す」となる。前半の「水が火を消すはたらき」に比較して「施しにも罪を消す働きがあること」を強調している。

(4) ルカ 11, 40-41. 新共同訳の「器の中にある物を」が「人に施せ」の前から省略されている。

ことです。即ち、内側を清めた人は外側をも清めるものであり、心が清められた人は、皮膚も体も清め始めるものなのです。さらに、主は「どのようにすれば私達は清められることができるか」を教え諭しながら、「施しをするべきである」と付け加えられたのでした。憐れみ深い主は、憐れみを示すようにと諭されました。それは、高価な代価で買った人々を救いたためであり、また洗礼の恵みを受けた後で罪を犯したなら、もう一度清められることができると、教えるためでした。

3. 愛する兄弟達よ、神の憐れみからの有り難い賜物に心から感謝しましょう！ 私達の罪を清めゆるしていただくために、霊的な薬によって、その傷を癒すようにしましょう！ 良心にいささかも傷のない人などあり得ないのでから・・・ また誰も自分の無罪を確信するあまり、自分の傷にはその薬など要らないと思込むほど、自分が清廉潔白であると自惚れてはなりません。「わたしの心を潔白にした、と誰が言えようか。罪から清めたと、誰が言えようか⁽⁵⁾」と書き記されているからです。さらに、聖ヨハネはその手紙の中で、こう述べています：「自分に罪がないと言うなら、自らを欺いており、真理はわたしたちの内にありません」⁽⁶⁾。

しかしながら、「自分に罪がないと誰もいえない」のに、もしも誰かが「自分には罪がない」と言うならば、その人は傲慢な人や愚かな人です。人々の〔罪の〕傷が癒された後にも、癒されたものの中に傷が残っていることをご存じである主は、その傷を再び癒すために役立つ治療法までも提供して下さいましたので、神の寛大さは何と必要で、またすばらしいものなのでしょう！

4. 愛する兄弟達よ、旧約・新約いずれの聖書を通して、神の民に憐れみのわざに励むようにと、いたる所で常に呼び掛けている神の戒めは、

(5) 箴 20, 9.

(6) I ヨハ 1, 8. *nos ipsos decipimus (nosmetipsos seducimus)* が違う所。() 内が *Textus Latinus Novae Vulgatae*. 以下同様に記述。

決して黙したり消え去ったりすることはありません。聖霊のすすめによって天の国への希望へと導かれている人は、「施しをするように」と命じられています。神はイザヤに命じてこう言われました：「勇気を出して叫べ、黙するな。声をあげよ、角笛のように。わたしの民に、その背きを、ヤコブの家に、その罪を告げよ」⁽⁷⁾。そして神は彼らの罪を彼らに課し、その悪行を御怒りに満ちてあらわにされた時、祈りや嘆願や断食を用いてもその罪の償いを果たし得ないこと、粗服や灰を身に纏っても神の御怒りを和らげることが出来ないこと、最後に、ただ「施しをすること」によってのみ、神を宥めることが出来る、と付け加えられ、こう言われたのです：「飢えた人にあなたのパンを裂き与え、さまよう貧しい人を家に招き入れ、裸の人に会えば衣を着せかけ、同胞に助けを惜しまないこと。そうすれば、あなたの光は時に応じて速やかに現れ、あなたの衣もすぐに立ち上がる。正義があなたを先導し、主の栄光があなたを取り囲む〔守る〕。あなたが呼べば主は答え、あなたが叫べば『わたしはここにいる』と言われる」⁽⁸⁾。

5. 神の御怒りを和らげる方法は神御自身の言葉によって与えられ、罪びとは何をなすべきかを神の教えが教示しています。〔人々の〕「正しい行い」によって神は満足され、憐れみの功德によって罪は清められるのです。「施しを貧しい人の心にしまっておけ。それはお前をあらゆる災難から救ってくれる⁽⁹⁾」とソロモンの書にあり、また「弱い人の叫びに耳を閉ざす者は、自分が〔神に〕呼び求める時が来ても答えは得られない⁽¹⁰⁾」とある通りです。自分が慈悲深くない人は神の慈悲をいただくことが出来ず、貧しい者の願いに人間味〔同情の心〕のない人は神に祈ったとしても、何も

(7) イザ 58, 1. 「喉をからして」のかわりにキプリアヌスのテキストでは *in fortitudine* : 「勇気を出して」とある。

(8) イザ 58, 7-9 a. 「あなたの光は曙のように射し出で、あなたの傷は速やかにいやされる」、「・・・主の栄光があなたのしんがりを守る」の部分が違う。

(9) シラ 29, 12. 施しを「お前の倉に蓄えておけ」が新共同訳。

(10) 箴 21, 13.

いただくことが出来ないのです。そしてこのことを、詩編の中で聖霊は明らかに証言して、こう述べています：「いかに幸いなことでしょう、弱いものに思いやりのある人は。災いのふりかかるとき、主はその人を逃れさせてくださいます」⁽¹¹⁾。

この戒めを覚えていたダニエル〔預言者〕はネブカドネツァル王が悪夢に悩まされ動揺していた時、この悪い事態を避け神の助けを求めるために解決策を提示しながら、こう言いました：「王様、どうぞわたしの忠告をお受けになり、罪を悔いて施しを行い、悪を改めて貧しい人に恵みをお与えになってください。そうすれば神はあなたの罪をこらえてくださるでしょう」⁽¹²⁾。しかし王は彼に従わず、自ら予見した不幸と災難に見舞われることになってしまったのです。しかも、それはもし彼が自分の罪を施しによって購ってさえしてたら、回避できたことなのです。

天使ラファエルも同じことを証明して、施しを喜んでしかも寛大にするように励まして、こう言っています：「断食と慈善の業を伴う祈りは良いものです。慈善の業は、死を遠ざけ、すべての罪を清めます」⁽¹³⁾。もしも「慈善の業」が支えとならなければ、私達の祈りや断食も効果が少なく、良い行いと実践が伴わなければ、懇願の祈りだけでは得るものが少ないということを、天使ラファエルは示しているのです。つまり、施しによって私達の祈りは効果のあるものとなり、施しによって生命は危険から救われ、施しによって魂は死より解放されるということを、天使は啓示し肯定しているのです。

6. 愛する兄弟達よ、私達はこれらのことを実践していないので、天使ラファエルが真理の証言をもって言ったことがらも分からないのです。使徒言行録にはこの事実に関する信仰が認められます。施しによって魂は「第

(11) 詩 41, 2. 原文脚注には詩 40, 2 とある。

(12) ダ = 4, 24. 後半は「そうすれば、引き続き繁栄されるでしょう」が新共同訳。

(13) トビ 12, 8-9, 「真実をもって祈りをささげ、正義をもって慈善の業をするほうが・・・」と新共同訳。

二の死」からだけでなく、「第一の死」からも救われるということが、実際に行われ、また起きた事柄の証拠によって明らかにされています。善行と施しに多大の貢献をしていたタビタが病気にかかり、亡くなった時、ペトロは彼女の遺骸の許に呼び寄せられました。使徒的な親切さで急いで駆けつけてみると、やもめたちがペトロのそばに寄って来て泣きながら、懇願し、生前に作って貰った数々の下着や上着を見せました。彼女達は、死んだタビタのために声を出して祈ったのではなく、タビタ自身の行いを持ち出して嘆願したのです。ペトロはこのような仕方では乞い求められる事は叶えられ、嘆願しているやもめたちにキリストの助けが与えられないわけではないと感じました。かつてキリスト御自身、やもめたちの作った服を身に纏っておられたのですから・・・そこで彼はひざまずいて祈り、やもめと貧しい人達の適切な「代弁者」として、彼女達が依頼した願いを主にささげてから、洗い清めてからお棺に収められていた遺体に向かって、「タビタ、イエズス・キリストの御名によって起きなさい⁽¹⁴⁾」と言いました。すると、主の御名によって願うことは何でも叶えられると福音書の中で言われた方は、直ちにペトロに助けをお与えになりました。こうして死は一時停止され、息をふきかえたのです。皆が皆、驚きあきれたことには、彼女の遺体は再びこの世の光の中へとよみがえったのです。慈善の功德はこれほど大きなことをなし遂げ、善行はこれほど力があるのです。困っているやもめたちに生きるのに必要なものを与えて助けていた人〔タビタ〕は、やもめたちの懇願のおかげで生き返ることが出来たのです。

7. それゆえ、私達の人生の師であり永遠の救いの教師である主は、福音書の中で信じる人々を活気づけ、活気づけられた人々には助言を与えながら、神の掟と天の戒めの中で「施しをすること」だけに絶えず励むよう命じ、私達がこの世の財産に依存するのではなく、天に宝を蓄えるように

(14) 使9, 40 b. 「イエズス・キリストの御名によって」はキプリアヌスの使用しているイタラ版 (Itala) よりのもので、新共同訳にはない。

戒めておられるのです。

「自分の持ち物を売り払って施しなさい⁽¹⁵⁾」と言われ、また「あなたがたは地上に富を積んではならない。そこでは虫が食ったり、さび付いたりするし、また、盗人が忍び込んで盗み出したりする。富は、天に積みなさい。そこでは、虫が食うことも、さび付くこともなく、また、盗人が忍び込むことも盗み出すこともない。あなたの富のあるところに、あなたの心もあるのだ⁽¹⁶⁾」とも言われています。

そして掟を完全に遵守して完成された「完璧な人」を示そうとして、こう言われます：「もし完全になりたいのなら、行って持ち物を売り払い、貧しい人々に施しなさい。そうすれば、天に富を積むことになる。それから、わたしに従いなさい⁽¹⁷⁾。また別な場所では、天の恵みを求める商人、持ち物すべてを投げうってでも永遠の生命を獲得する商人について語り、高価な真珠、即ち「永遠の生命」を——キリストの御血〔という代価〕による貴重な真珠を——自分の財産と引き換えに買わねばならないと言われます。「天の国は次のようにたとえられる。商人が良い真珠を探している。高価な真珠の一つ見つけると、出かけて行って持ち物をすっかり売り払い、それをかう⁽¹⁸⁾」。

8. 最後に、貧しい人達を支援し世話するために働いていたアブラハムの子孫をも、主は招かれるのです。というのも、ザアカイが「〔主よ〕ごらんください、わたしは財産の半分を貧しい人々に施します。また、だれかから何かだまし取っていたら、それを四倍にして返します」と言った時、

(15) ルカ 12, 33 a.

(16) マタ 6, 19-21. いくつかの単語に相違が見受けられる。たとえば, *condere* (*thesaurizare*); *comestura* (*aerugo*); *exterminat* (*demolitur*) 等。

(17) マタ 19, 21. *omnia tua* (*quae habes*); *egenis* (*pauperibus*).

(18) マタ 13, 45-46. *negotianti* (*negotiatori*); *Ubi autem inuenit pretiosam margaritam* (*Inventa autem una pretiosa margarita*). ここでは文章構文も違いますが、意味は同じ。

主は「今日、救いがこの家を訪れた。この人もアブラハムの子なのだから⁽¹⁹⁾」とお答えになりました。

それというのも、もしアブラハムが神を信じ、そのことが「正しいこと」と認められたのであれば⁽²⁰⁾、神の掟に従って施しをする人も、神を信じていることは確かです。そしてこの信仰の真理を持っている人は神に対する畏敬の念を持っています。神に対する畏敬の念を持っている人は貧しい人々に対する憐れみの心の中に、神を思うものです。その人はそう信じる通りに働きます。神の言葉によって、前もって言われたことが真実であり、また聖書は決して嘘をつかないと知っているからです。「実を結ばない木」即ち「実りをもたらない人」は切り取られ、火に投げ込まれるが⁽²¹⁾、慈悲深い人は天国に招かれる、と知っているからです。

また別の場所で、主は「働く人、実りをもたらず人」を「忠実な人」と呼んでいます。が、「実りをもたらない人」に対しては信仰を否定し、こう言われます：「不正にまみれた富について忠実でなければ、だれがあなたがたに本当に価値あるものを任せるだろうか。また、正しい人のものについて忠実でなければ、それがあなたがたのものを与えてくれるだろうか⁽²²⁾」

9. しかしながら、こうして寛大な施しを始めたなら、自分の限りある財産を使い果たして貧困状態に陥ってしまいはせぬか、と心配したり恐れたりしているのでしょうか。この点に関しては心配しないようにしなさい。恐れないようにしなさい。キリストのために役立てられ、神の業が行われているのですから、[財産が]無くなってしまふことはありません。このこ

(19) ルカ 19, 8-9. 相違点：ex substantia mea (bonorum meorum); Domine [主よ] という語がない。egenis (pauperibus); si cui quid fraudavi (si quid aliquem defradavi); quoniam (eo quod); hic (ipse); est (sit).

(20) ロマ 4, 9. 参照。

(21) マタ 3, 10. 参照

(22) ルカ 16, 12-23. in iusto (in alieno); uestrum (quod vestrum est).

とを私の権威であなたに誓うわけにはいきませんが、聖書の言葉に対する信頼と神の約束という権威に基づいて、わたしは約束します。聖霊はサロモンを通してこう語っています：「貧しい人に与える人は欠乏することがない。目を覆っている者は多くの呪いを受ける」⁽²³⁾。慈悲深い者、施しを行う者は欠乏することがないこと、しかし出し惜しみをする者、施しを行わない者は、やがて困窮するようになることを示しているのです。

使徒聖パウロもまた、主の靈感の恵みに満たされてこう言っています：「種を蒔く人に種を与え、パンを糧としてお与えになる方は、あなたがたに種を与えて、それを増やし、あなたがたの慈しみが結ぶ実を成長させてくださいます。あなたがたはすべてのことに富む者とされます。」⁽²⁴⁾。さらにまた「この奉仕の働きは、聖なる者たちの不足しているものを補うばかりでなく、主に対する多くの感謝を通してますます盛んになるからです⁽²⁵⁾」とあります。それは、施しと私達の行いに対する神への感謝が貧しい人々の祈りによってなされているうちに、善行をおこなった人の富は神の報いによって増大しているからです。

主はまた福音書の中で、このような人の心を配慮し、不誠実で不信仰なものを咎め、予知された声をもって〔＝先見の明をもって〕証言しておられます：「『何を食べようか』『何を飲もうか』『何を着ようか』と言って、思い悩むな。それは、異邦人が切に求めているものだ。あなたがたの天の父は、これらのものがみなあなたがたに必要なことをご存じである。何よりもまず、神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものはみ

(23) 箴 28, 27.

(24) II コリ 9, 10-11 a, edendum (manducandum); seminationem (semen); ut in omnibus locupletemini (in omnibus locupletati in omnem simplicitatem). が相違点。

(25) 同 9, 12, Administratio (ministerium); non tantum supplebit (non solum supplet); abundabit (abundat); per multam gratiarum actionem in Domino (per multas gratiarum actiones in Deo). が違う。

な加えて与えられる」⁽²⁶⁾。神の国とその義を求める人々には一切のものが加えて与えられる、と主が言われるのです。つまり、最後の審判の日が到来する時、主の教会のために働いた人々は神の国に入ることをゆるされるのだ、と主が言われるのです。

10. あなたは、たとえ寛大に施しを始めても、自分の財産がいずれは無くなりはいませんか、と心配しています。それでもかわいそうな人であることを知らないのです。財産を無くしはしまいかと心配しているうちに、実は生命そのものと救いを失いつつあるのですから。また自分の持ち物が何ひとつ減らないようにと気を付けているうちに、自分の魂〔を大切にすること〕よりもお金の愛好者になってしまって、自分をすり減らしていることに気が付かないのです。あなたは自分のために財産を失うのではないかと恐れているうちに、あなた自身が財産のために破滅してしまうのです。それゆえに、使徒〔聖パウロ〕は実に巧みに叫んで、こう言っているのです：「わたしたちは、何も持たずに世に生まれ、世を去るときは何も持って行くことができないのです。食べる物と着る物があれば、わたしたちはそれで満足すべきです。金持ちになろうとする者は、誘惑、罠、無分別で有害なさまざまな欲望に陥ります。その欲望が、人を滅亡と破滅に陥れます。金銭の欲は、すべての悪の根です。金銭を追い求めるうちに信仰から迷い出て、さまざまなひどい苦しみで突き刺された者もいます」⁽²⁷⁾。

11. あなたは、たとえ寛大に施しをし始めても、自分の財産がいずれは無くなりはいませんか、と心配していませんか？ しかし、正しい人が生活に必要な物に事欠くようなことが、いつあったでしょうか？ 「主は従う

(26) マタ 6, 31-33, cogitare (ergo solliciti esse); edemus (manducabimus); vestimur (operiemur); nationes quaerunt (omnia gentes quaerunt); horum omnium indigetis (his omnibus indigetis); adponentur (adiciuntur), が相違点。
(27) I テモ 6, 7-10, exhibitionem (alimenta); tegumenta (quibus tegamur); simus (erimus); muscipula (laqueum); (stulta); nocentia (nociva) 等が主な相違点。

人を飢えさせられることはない⁽²⁸⁾」と書き記されているからです。

エリヤは荒野にいた時、数羽の鳥に食べ物を運んできてもらって養われ⁽²⁹⁾、ダニエルは王の命令でライオンの餌食にと穴の中に閉じ込められた時、天からの糧で養われたのでした⁽³⁰⁾。そしてあなたは、施しをする者、神に認められた者にも食物に事欠くようなことはないかと恐れています。が、主御自身が福音書の中で、疑い深く信仰の薄い者を非難して、こう証言しておられます：「空の鳥をよく見なさい。種も蒔かず、刈り入れもせず、倉に納めもしない。だが、あなたがたの天の父は鳥を養ってくださる。あなたがたは、鳥よりも価値あるものではないか」⁽³¹⁾。

神は鳥たちを養い育て、雀たちに日毎の糧を与えられるのですが、鳥たちは神の事柄を理解することが出来ないのに、食べ物にも飲み物にも事欠くことはないのです。キリスト者であり、神の僕であり、善行に励んできた者であり、主に愛された者であるあなたに、何か事欠くようなことが起こるとでも思っているのですか？

12. 「キリストを養う者自身は、キリストによって養われない」とか、「地上の物に事欠く人には天上の物が与えられる」などと、もしも考えているならば、そのような不信仰な考えは一体どこから出たのでしょうか？ そのような不敬で、神を冒瀆するような考察は一体どこから出たのでしょうか？ 不信仰な人の心は信仰の家で、一体何をするのでしょうか？ キリストに全幅の信頼を寄せていない人が、どうしてキリスト者と呼ばれるのでしょうか？ むしろ「ファリサイ派」という名が、あなたにはびつたりです。主が福音書の中で施しについて語られた時、私達がこの世の富で前もって善行をして友達をつくるように、そうすれば後に彼らが私達を永遠

(28) 箴 10, 3 a.

(29) 王上 17, 6.

(30) ダ = 6, 17 以下参照。

(31) マタ 6, 26. *aspicite (respicite)*; *seminant (serunt)*; *colligunt (congregant)*; *alit (pascit)* が相違点。

の住処に受け入れてくれるであろう、と誠実かつ有効に警告して下さった時、この記事の直後に聖書はこう述べているのです：「金に執着するファリサイ派の人々が、この一部始終を聞いて、イエズスをあざ笑った⁽³²⁾」。

このような人達は今でも教会で見かけます。閉ざされた耳と曇らされた心の持ち主には、霊的な、救いに役立つ忠告についてのどんな光も入らないのです。こういう人達はその話の中でしもべをあなどることがあっても、別に驚く必要もありません。主御自身もこのような人達からあなどられたことを、私達は知っているのですから・・・

13. 将来への不安と気掛かりのゆえに「施しの実践」を躊躇しているかの如く、どうしてそんなつまらない、馬鹿げた考えで、自分に拍手をしているのですか[自惚れているのですか]？ むなししい言いつの幻影を、どうしていくつも並べ立てたりするのですか？ むしろ真実であることを告白しなさい！ 欺くことが出来ないと知り、心の奥底にある秘密をあかさなさい！ 不毛の暗闇があなたの心を占領してしまったのです。真理の光を遠ざけているうちに、貪欲の大きな暗闇が物欲に満ちた心を盲目にしてしまったのです。あなたはお金の捕虜であり奴隷なのです。貪欲の鎖と枷(かせ)に縛られています。キリストがかつてそれを解いてくださったのに、再びあなたは鎖に繋がれてしまったのです。あなたはお金を大事にしていますが、大事にされたお金があなたを大事にしてはくれないのです。財産を蓄えています、その重みがああなたの上に重くのしかかってくるのです。豊かな収獲に愚かにも有頂天になっていた金持ちに対して、主が何と答えられたかをあなたは覚えていないのですか？ 「愚かな者よ、今夜、お前の命は取り上げられる。お前が用意した物は、いったいだれのものになるのか⁽³³⁾」と主は言われたのです。

(32) ルカ 16, 14. cupidissimi (avari); inridebant (deridebant illum) が相違点。

(33) ルカ 12, 20. expostulatur anima tua (animam tuam repetunt a te); ergo (autem). が相違点。

どうしてあなたはひとりで、自分の富に注目しているのですか？ どうしてあなたの罰となるために、財産の重荷を積み上げているのですか？ この世で豊かになればなるほど、神の御前では貧しい者となるのです。あなたの収入を神と分け合いなさい！ あなたの収獲をキリストと共に分かち合いなさい！ あなたのために、キリストを地上の財産共有者にしなさい！ そうすれば、キリストもあなたのことを天国の「共同の世継ぎ」としてくださるのです。

14. この世で自分は金持ちだと思っている人は皆間違っており、騙されているのです。黙示録の中で、正しい非難でもってそのような人を叱責している主の声に耳を傾けなさい。「あなたは、『わたしは金持ちだ。満ち足りている。何一つ必要な物はない』と言っているが、自分が惨めな者〔哀れな者〕貧しい者、目の見えない者、裸の者であることが分かっていない。そこで、あなたに勧める。裕福になるように、火で精練された金をわたしから買うがよい。裸の恥をさらさないように、身に着ける白い衣を買い、また、見えるようになるために、目に塗る薬を買うがよい」⁽⁹⁴⁾。

それゆえ、裕福で金持ちであるあなたは、自分のために「火で精練された金」を、キリストから買いなさい！ もしも、施しと正しい行いによって清められるならば、自分の汚れも火で焼き尽くされたかの如く、純金となることが出来るのです。〔さらに〕、自分のために「白い衣」を買いなさい！ アダム以来裸であり、醜い姿であることを恐れていたあなたが、「キリストの白衣」を身に着けるためです。そして裕福で金持ちの貴婦人であるあなたは、悪魔の目薬ではなく、「キリストの目薬」を自分の目につけなさい！ こうして〔よい〕行いと徳性によって神に功をたて、やがて神を

(94) 黙3, 17-18. ditatus (locupletatus); rei (なし); quoniam (quia); miser のあとに miserabilis が省略されている。ignitum de igni (igne probatum); vestem albam ut vestiariis (vestis albis induaris); foeditas (confusio); collyrio inungue (collyrium ad inungendum); が相違点。

目の当たりに見ることが出来るようになるためです。

15. しかしあなたはそのような人であるので、教会内で働くことは出来ません。というのも、真っ暗闇に覆われ夜に包まれた眼では、困窮している人とか貧しい人とかを見分けることが出来ないからです。裕福で金持ちのあなたは、コルバン〔神へのささげ物⁽³⁵⁾〕のことなど全く顧みないで、「主の食卓」〔聖体祭儀〕に供え物も携えないで赴いて、「主の食卓」を祝っていると思っているのですか？ 貧しい人が捧げた物の分け前を取ろうとしているのですか？

福音書の中に出てくる、神の掟をしっかりと覚えていた、やもめのことを考えてみなさい。困窮のさなかにあっても、乏しい中から善行に励み、自分の持っていたお金を全部、レプトン銀貨2枚とも、賽銭箱に入れたのです。主は彼女のことに気付かれた時、「その金額」ではなく「その志」の点から彼女の行いを吟味され、「いくら」出したかではなく、「いくらの中からか」を考慮して、こうお答えになりました：「確かに言うておくが、この貧しいやもめは、神への供え物としてだれよりもたくさん入れた。あの金持ちたちは皆、有り余る中から献金したが、この人は、乏しい中から持っている生活費を全部入れたからである」⁽³⁶⁾。彼女はなんと幸せで誉れ高き女性でしょう！ 最後の審判の日が到来する前に、もう審判者〔キリスト〕の声によって賞賛を受けることが出来たからです。金持ちの人達、自分の不毛さと不幸〔不信仰〕を恥ずかしく思いなさい！ やもめや貧しいやもめが現れるのは「善行において」なのです。孤児達ややもめ達に与えられる物すべてを、彼女も受け取るはずであったのに、かえって与えたのです。この教えによって、貧しい人々でさえ善行に励まねばならないの

(35) マコ 7, 11, 参照。

(36) ルカ 21, 3 以下。amen (vere); ista (haec); indona Dei (ない); de eo quod abundauit (ex abundantia sua); (in munera)がないが, in dona Deiに相当する。omnem quemcumque habuit uictum misit (omnem victum suum, quem habebat, misit) は構文上の相違。

であれば、どのような罰が不毛の金持ちに与えられるかを、私達は知ることが出来ます。それに、この善行は神にささげられること、そして捧げた人は誰でも神に功を立てることになる、ということを私達が悟るために、キリストはそれを「神に対するささげもの」と呼ばれました。神に対するささげものとして、あのやもめはレプトン銀貨2枚とも捧げたのだ、と主が公表したのは、貧しい人々に憐れみを注ぐ人は、「神に貸しをつくること」になるということ、を、ますます明示するためでした。

16. しかしながら、愛する兄弟達よ、誰かが自分の子供達の利益のためであれば弁解が出来ると思い込み、キリスト者を「善行や正しい行い」から阻止したり抑えたりすることは出来ません。霊的な出費に関しては、キリストを、即ちささげものを受け入れると自ら仰せになった方のことを考えねばなりません。そして私達は、自分の子供達のために奴隷仲間ではなく、主を優先させねばなりません。というのも、主御自身が教え、戒めてこう言われるのです：「わたしよりも父や母を愛する者は、わたしにふさわしくない。わたしよりも息子や娘を愛する者も、わたしにふさわしくない」⁽³⁷⁾。

また申命記にも信仰を強め、神に対する愛を深めるために、同様の事柄が書き記されています。「彼は自分の父母について『わたしは彼らを顧みない』と言い〔兄弟を認めず〕、自分の子さえ無視し、あなたの仰せに従い、契約を守ったからです」⁽³⁸⁾。

私達は心を尽くして神を愛するならば、神よりも父母や子供を大切にすることは出来ないのです。使徒聖ヨハネもその手紙の中で、貧しい人に善行などしてあげたくないと思っている人達の内に、神の愛はない、と言っています：「世の富を持ちながら、兄弟が必要な物に事欠くのを見て同情しない者があれば、どうして神の愛がそのような者の内にとどまるでしょ

³⁷⁾ マタ 10, 37. diligit (amat); super me (plus quam me). が相違点。

³⁸⁾ 申 33, 9.

う？」⁽³⁹⁾。というのも、もし貧しい人に施しをすることによって神が借りをつくり、また最も小さな人々に与えたことがキリストに与えたことになるならば、誰かが天国のことより地上のことを優先したり、神のことより人間のことを大事にしたりすることは、ないのです。

17. 列王記上に登場するあのやもめは、早魃と飢餓の中で食べ物を食べ尽くし、残った僅かの小麦粉と油で「焼いたパン」を一つ作り、それを食べてから子供達と一緒に死のうとしていた時、エリヤがやって来て、自分にまず何か食べる物をくれるように求めました⁽⁴⁰⁾。その時残っていた物は彼女が子供達と食べるためのものでした。彼女は〔エリヤの願いに〕従うことをためらわず、飢餓と欠乏のさなかにあっても母は子供達よりエリヤを大事にしたのです。こうして神の眼前で、神のお喜びになることが行われたのです。求められたことはすぐに、しかも喜んで提供されたのです。有り余っている物の一部ではなく、わずかな物が全部、ささげられたのです。自分の飢えている子供達より先に、他の人が食べ物にありついたので、欠乏と飢餓の状態で、憐れみ〔の行い〕のほうが食べ物より大事にされたのです。この救済行為においては、肉に従う生命は軽んじられ、霊による魂が尊重されたのです。

それゆえ、エリヤは「キリストの予型」の役割りを果たしながら、主がその憐れみによって各人に報いを与えて下さることを示しています。神は答えて言われました：「主はこう言われる。主が地の表に雨を降らせる日まで、壺の粉は尽きることなく、瓶の油はなくならない」⁽⁴¹⁾。神の約束に対して彼女が信頼したからこそ、やもめが与えた物は増え続け、正しい行いと憐れみの業の功德は増大し、使い尽くしたものに小麦粉と油の壺は満たされたのです。エリヤに与えた物を、この母親は子供達から奪い取ったの

⁽³⁹⁾ Iヨハ3, 17. *desiderantem (necesse habere); cluserit (clausurit); (ab eo)* がない。in illo (in eo).

⁽⁴⁰⁾ 王上17, 10 以下参照。

⁽⁴¹⁾ 同17, 14.

ではなく、寛大に、敬虔に行ったことを、子供たちに与えたのです。

彼女はまだキリストを知りませんでした。その教えも耳にしたことはありませんでした。その十字架と受難により購われたものではありませんでしたので、その御血の代わりに食べ物と飲み物で埋め合わせをしたのです。このことから、キリストよりも自分や自分の子供達のことを大事にして自分の富を守ろうとしたり、豊かな財産を貧しい人々の必要のために提供しない人は、教会の中でどれほど大きな罪を犯しているかが明らかになることでしょう。

18. しかしながら、家には子供がたくさんいる〔父親な〕ので、その〔子沢山な〕ことが寛大な善行〔施し〕に励むことを困難にしている、と言うのでしょうか。まさにそのことのゆえに、即ちたくさんの子供〔“夫婦の愛の証し”，という語で表現される〕の父親であるということで、あなたはもっと働かねばなりません。彼らのために主に懇願することはたくさんあります。たくさんの人々の罪が購われ、たくさんの人々の良心が清められ、たくさんの人々の魂が救われなければならないからです。

この世の世俗的な生活において子供を養育するためには、子供の数が多ければ多いほど費用もかさむのですが、同じように、霊的生活・神のための生活においては子供の数が増えるにつれて、善行のための出費も多くしなければなりません。そのように、ヨブは子供達のためにたくさん犠牲を捧げました。つまり一家の子供の数に応じて、神に捧げる供え物の数も決まった、ということです。それに、神の眼前で罪が犯されるということがない日など、一日たりともあり得ないのですから、その罪を清めることが出来る犠牲を毎日欠かさすわけにはいかないのです。

聖書はこう証明して言っています：「ヨブという人は無垢な正しい人で七人の息子と三人の娘を持ち、彼らのために神にいけにえをささげて彼らを清め、彼らの人数に相当し、かれらの罪の数に応じて子牛一頭をささげた」⁽⁴²⁾。もしあなたが本当に自分の子供を愛するならば、そしてもし父親と

(42) ヨブ 1, 1a-3+5.

しての優しい愛を子供達にあふれるほど示したいならば、もっと善行に励まなければなりません。正しい行い〔施し〕によって自分の子供のことを、神の御加護のもとに委ねるためです。

19. 自分の子供の父親は「一時的で変わりやすい弱い父」〔自分〕ではなく、霊的な子供の父親は「永遠不変で力強い父」〔神〕、だと考えるようにしなさい。跡継ぎの子供達のために蓄えてきた財産は、神に委ねなさい。神を子供達の後見人、管財人としなさい。神をこそ、その權威によってこの世のあらゆる不正に対抗して下さる保護者にしなさい。神に委ねられた財産は、国家といえども取り上げることはしないし、国庫も邪魔することもなく、司法のいかなる策略も覆すことがないからです。神を保護者に立てて守られる財産は、安全に保たれます。こうすることこそ、かわいいわが子の将来のために配慮することなのです。こうすることこそ、将来の跡継ぎのために、父親の愛情こめて世話をすることなのです。聖書の言葉に信頼するところ言われています：「若いときにも老いた今も、わたしは見えていない。主に従う人が捨てられ、子孫がパンを乞うのを。生涯、憐れんで貸し与えた人には、祝福がその子孫に及ぶ」⁽⁴³⁾。さらに「咎めなく正しい道を歩むひとは、幸いな子らをのこす⁽⁴⁴⁾」とあります。

従って、もし子供達のために忠実に世話をしない父や、宗教的で本当の敬虔さをもって彼らの面倒をみない父なら、職務違反者で裏切り者の父です。天国の富よりもこの世の富に熱中する者は、自分の子供をキリストに委ねることより悪魔に任せることを欲しているのです。こうして二倍の罪を犯し、二重の犯罪を犯しているのです。即ち、「子供のために、父である神の助けを求めようとしないこと」と「キリストよりも財産を愛することを子供に教えていること」になるからです。

20. 自分の子供に対する父親としては、父トビアの姿にならなさい。

(43) 詩 37, 25-26. 原文脚注には詩 36, 25-26 とある。数え方の違いから。

(44) 箴 20, 7.

彼がその子に与えた通りの有益な、救いに役立つ教えを、あなたも自分の子供達に与えなさい。彼が命じたことを、あなたも子供達に命じなさい。彼はこう言います：「さあ、今、子たちよ、あなたがたに命じる。心から神に仕え、神が望まれる事を行いなさい。あなたがたの子供たちがいつも正義を行い、慈善の業に励み、神に従い、どんなときでも力を尽くして心から神の御名をほめたたえるように教えなさい」⁽⁴⁵⁾。さらにまた、こうもあります：「わが子よ、生きていくかぎり、主をいつも覚えておくのだ。罪を犯したり、主の戒めを破ったりしようとしてはならない。命あるかぎり、正義を行いなさい。悪の道を歩んではならない。なぜならば、真理を行うなら人はその行いのゆえに栄えることになるからである。すべて正義を行う人々には、お前の財産のうちから施しをしなさい。施しをするに際しては喜んでするのだ。どんな貧しい人にも顔を背けてはならない。そうすれば、神もお前から御顔を背けることは決してなさらないだろう。お前の財産に応じて、豊かなら豊かなりに施しをしなさい。たとえ、少なくとも少ないなりに施すことを恐れてはならない。そうすることで、お前は窮乏の日に備えて、自分のために善い宝を積むことになるのだから。施しをすれば、人は死から救われ、暗黒の世界に行かずに済むのである。施しは、それをするすべての者にとっていと高き方の御前にささげる善い献げ物となる」⁽⁴⁶⁾。

21. 愛する兄弟達よ、どんな贈り物が、また誰の申し出が神の御前に賞賛をいただくのでしょうか。異教徒が贈り物をする場合には、総督や皇帝の臨席があると盛大で名誉あることとされているようです。そして、そのための準備と出費は、偉い人達に気にいられるために、贈呈者の間では極めて大切なことなのです。しかし、神とキリストを贈り物の〔贈呈式の〕参列者としていただくことは、なんとすばらしく、またなんと大きな光

(45) トビ 14, 8.

(46) 同 4, 5-11.

栄でしょうか。そこでの準備はより一層豪華に、その出費もより一層寛大にしなければなりません。そこでは、この見世物〔贈り物の贈呈式〕のために天の軍勢が集い、すべての天使が集い来るのです。そこでは、贈呈者から求められるものは「四頭立ての戦車」でもなく、「総督の職」でもありません。彼に与えられるものは、「永遠の生命」なのです。空しくて一時的にすぎない「好意」は民衆から得られません、天国の「永遠の報い」がいただけるのです。

22. しかし、怠惰で不毛な者、金銭欲につかれて救いの実りある行いを何もしない者は、さらに恥じるがよいでしょう。自分の破廉恥な行いと悪評のために赤面し、汚れた良心を責め苛むがよいでしょう。悪魔とその手下、即ち、破滅と死へと赴いた人達を、各々自分の眼前にすえて置くのがよいでしょう。悪魔は突然キリストの民の間に現れて、かれらの間にいながら自らの判断で、比較を試みて挑発して、こう言うのです：「お前がわたしと共に眺めている者達のために、わたしが平手打ちを受けたのではなく、鞭打ちに耐え、十字架を担い、血を流したのでもない。受難と流血の高価な代価で私の家族を購ったのでもない。私は彼らに天国を約束したり、修復された永遠不死性をもって彼らを楽園に呼び戻したりもしない。しかし彼らがわたしのために用意した贈り物は、何と貴いものであろう！ 何と大きな物であらう！ 〔そのために〕どれほど多くの、長い仕事をしたことであらう！ それに極めて出費のかさむ方法で要求された物を、彼らは準備してくれた。自分の財産を質に入れたり、売却したりして、贈り物の準備をしてくれたのだ。もしもそれ相当の評価が伴わないから、かれらは非難と罵声を浴びて追放され、民衆の狂気によってほとんど石殺しにされるであらう。ああキリストよ、このような贈呈者、金持ち、富を持って余している者達に示して下さい——彼らは教会の中で、あなたのおられる所、あなたが見ておられる所で、自分の財産を質入れしたりばらまいたりして、そのような贈り物を差し出しているのだということを。確かに、彼らは天国の富のためにと、所有物をより良きものと変えているのです。

このような贈り物の中で、空しくてこの世的な物によって、養われる者は誰もなく、衣服を着せられる者も誰もなく、他のひとのために飲食物の慰めとして支えられる者も誰もありません。提供者の狂気と観客の誤謬の中にあって、あらゆることは欺く快楽の、放蕩的で愚かな虚栄によって、減んでいくのです。そこで、貧しい人々の中であなた〔主〕は着物を着せられ、食事をいただかれました。そして〔あなたのために善行に〕励む人々に永遠の生命を約束されました。「あなたの人々」と「私の減び行く人々」とは、ほとんど比較になりません。かれらは神の報いと天国の報酬をあなたからいただいているのですから。」

23. 愛する兄弟達よ、これらの事柄に対して私達は何と答えるのでしょうか。神を汚す不毛さ〔頑迷さ〕と夜の暗闇に覆われた金持ちの心を、どのような理由でわたしたちは弁護するのでしょうか。どのような口実で無罪と認めるのでしょうか。キリストの受難と血の代価として、いささかなりともキリストにお返しをしていない私達は、悪魔の手下よりも小さな者〔劣る者〕です。主の僕が何をなすべきかを教えて、主は私達に掟を与えられました。善行に励む人に報いを約束し、頑迷な人には罰を与えることで威嚇される主は、何を裁くかをも、前もって告げられました。のろまな人は何と言いつてをすることが出来るのでしょうか。頑迷・不毛なひとはどんな弁解をするのでしょうか。命じられたことを果たさない僕に対して、主は威嚇したことを実行に移されるのです。主はこう言われます：「人の子は、栄光に輝いて天使たちを皆従えて来るとき、その栄光の座に着く。そして、すべての国の民がその前に集められると、羊飼いが羊と山羊を分けるように、彼らをより分け、羊を右に、山羊を左に置く。そこで、王は右側にいる人たちに言う。『さあ、わたしの父に祝福された人たち、天地創造の時からお前たちのために用意されている国を受け継ぎなさい。お前たちは、わたしが飢えていたときに食べさせ、のどが渇いていたときに飲ませ、旅をしていたときに宿を貸し、裸のときに着せ、病気のときに見舞い、牢にいたときに訪ねてくれたからだ。』すると、正しい人たちは王に答える。『主

よ、いつわたしたちは、飢えておられるのを見て食べ物を差し上げ、のどが渴いておられるのを見て飲み物を差し上げたでしょうか。いつ、旅をしておられるのを見てお宿を貸し、裸でおられるのを見てお着せしたでしょうか。いつ、病気をなさったり、牢におられたりするのを見て、お訪ねしたでしょうか。』そこで、王は答える。『はっきり言うておく。わたしの兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたことなのである。

それから、王は左側にいる人たちにも言う。『呪われた者ども、わたしから離れ去り、悪魔とその手下のために用意してある永遠の火に入れ。お前たちは、わたしが飢えていたときに食べさせず、のどが渴いたときに飲ませず、旅をしていたときに宿を貸さず、裸のときに着せず、病気のとき、牢にいたときに、訪ねてくれなかったからだ。』すると、彼らも答える。『主よ、いつわたしたちは、あなたが飢えたり、渴いたり、旅をしたり、裸であったり、病気であったり、牢におられたりするのを見て、お世話しなかったでしょうか。』そこで、王は答える。『はっきり言うておく。此の最も小さい者の一人にしなかったのは、わたしにしてくれなかったことなのである。』こうして、この者どもは永遠の罰を受け、正しい人たちは永遠の命にあずかるのである。⁽⁴⁷⁾

困窮している人、貧しい人に与えたことは、主に与えたことになると言われ、また困窮している人、貧しい人に与えないならば、主が苦しまれると言われるのです。キリストはこれ以上のことを何か私達は言うことがお出来になったでしょうか？ これ以上どのようにして主は私達の慈善行為

(47) マタ 25, 31-46, claritate (gloria); colligentur (congragabuntur); segregabit (separabit); quemadmodum (sicut); percipite (possidete); ab origine (a constitutione mundi); potastis (dedisti mihi bibere); fui (eram); abduxistis (collegistis); textistis (operuistis); infirmatus sum (infirmus); potauimus (dedimus tibi potum); abierunt (ibunt); in ambustionem aeternam (in supplicium aeternum) 等の単語上の相違がかなり多く見受けられる。

と正しい行いを激励出来たでしょうか。

それは、教会内にいる人で兄弟のことを思いやって心動かされない者でも、キリストのことを黙想することによって心動かされるように、また、困窮と欠乏のさなかにある仲間達のことを顧みない者も、自分が軽蔑していた人の中にこそ主がおられるということを考えるようになるためです。

24. それゆえ、愛する兄弟達よ、自分の畏敬を神に向かうものとし、さらに、この世をすでに軽蔑し踏みつけ、自分の心を天上のこと、神のことに向けた者は、信仰に満ちあふれ、ささげの心を持ち、絶えざる働きによって、主に相応しい者となるために、従順を示すようにしましょう！ 「天国の衣服」をいただくことが出来るように、「この世の衣服」をキリストに献上しましょう！ アブラハム、イサク、ヤコブと共に「天国の食卓」に与えることが出来るように、この世の飲食物を献上しましょう！ 少ししか収穫がないということのないように、たくさん種を蒔いておきましょう！ 安全と永遠の救いのために、時間があるうちに、考えておくようにしましょう！ 使徒聖パウロも忠告してこう言っています：「ですから、今、時のある間に、すべての人に対して、特に信仰によって家族になった人々に対して、善を行いましょう。たゆまず善を行いましょう。飽きずに励んでいれば、時が来て、実を刈り取ることになります。」⁽⁴⁸⁾。

25. 愛する兄弟達よ、使徒達のもとで信者の集会は何をしていたか、考えてみることにしましょう。初代教会当時、人々の心は偉大な諸徳で活気に満ち溢れていました。その当時、信者の信仰は、まだ信仰の熱意で燃えていました。彼らは自分の家や農地を売り払らい、貧しい人達に分配するためのお金として、喜んで、寛大に使徒達に差し出しました。〔こうして彼らは〕この世の財産や地所を売却したり手放したりして、かの地での「永遠の財産所有」という実りと変え、かの地で永遠に住まい始める住処を準

(48) ガラ 6, 10+9. quod(なし); non deficiamus (infatigabiles); (non deficientes) がキブリアヌスの原文には書き記されていない。

備したのです。当時、皆が愛においてこれほど大きな一致を保っていたので、善い業に励むこともこれほど大きな成長をとげたのです。使徒言行録にこう書いてあります：「信じた人々の群れは心も思いも一つにして行動し、彼らの間にはいかなる差別もなく、一人として持ち物を自分の物だと判断した者はなく、すべてを共有していた。」⁽⁴⁹⁾。

これこそ、霊的な誕生によって、真に「神の子」となる、ということなのです。これこそ、神の掟によって、父である神の公正さを模倣する、ということです。というのも、神から与えられた物は何であれ私達が使う時には共有のものであり、また全人類が神の善と寛大さを等しく受けることが出来るように、神の恩恵と賜物から除外される人が一人でもあってはならないからです。このように、一日は等しく明け、太陽は照らし、雨は潤し、風が吹き、そして睡眠をとる人々にとって睡眠は〔みな同じ〕ひとつの行為であり、星や月の輝きもみな共有のものです。このような平等の手本により、地上の所有者であり、また自分の収入や利益を兄弟愛を持って分かち合う人は、それらが無償で与えることにより、共有のものであるのと同時に正しい人で、まさに父である神の模倣者なのです。

26. 愛する兄弟達よ、善行に励む人々の栄光はどのようなものとなるの

(49) 使 4, 32. この文章は相違点が多いので、並列しておくことにする。

Cyprianus : Turba autem eorum qui crediderant anima ac mente una agebant nec fuit inter illos discrimen ullum nec quicquam suum iudicabant ex bonis quae eis erant, sed fuerunt illis omnia communia.

「信じた人々の群れは心も思いも一つにして行動し、彼らの間にはいかなる差別もなく、一人として持ち物を自分の物だと判断した者はなく、すべてを共有していた。」

Vulgata : Multitudinis autem credentium erat cor et anima una, nec quisquam eorum, quae possidebant, aliquid suum esse dicebat, sed erant illis omnia communia.

「信じた人々の群れは心も思いも一つにし、一人として持ち物を自分の物だという者はなく、すべてを共有していた。」

でしょうか。主がその民の数を数え始め、私達の善行に対して約束された報いをお与えになる時、つまり「地上のもの」にかわって「天上のもの」を、「一時的なもの」にかわって「永遠のもの」を、「ささいなもの」のかわりに「偉大なもの」を与えられる時、喜びはどんなに大きく、最高のものとなることでしょう！ それに、主はその成聖の恩恵によって私達に和解を与えてくださった父〔である神〕に私達をささげ、永遠性と不死性を私達に与え、永遠・不死に向けて御血の「活かす力」によって私達を活かして下さったのです。ご自分が約束したことに対する誠実さと真実さにより、天国を開き、私達を再び樂園に呼び戻して下さったのです。

このことをしっかりと心に銘記しましょう。このことを信仰に満たされて悟り、心を尽くして愛しましょう。このことを絶えざる善行に励む寛大さで獲得するようにしましょう！

愛する兄弟達よ、救いのわざ〔慈善に励むこと〕はすばらしく、また神祕的な事柄で、信者の大きな慰め、私達の安全の健全な番人、希望の保星、信仰の監督、罪の治療薬です。また権力行使者に課せられたことであり、偉大なことであっても容易なことであり、迫害の危険を伴わない平和の栄冠であり、神の真実・最大の賜物です。弱い者には「不可欠のもの」、強い者には栄誉あるもので、これによって助けられたキリスト者は霊的な恩恵を受け、審判者であるキリストに認められ、神を債務者に立てることになるのです。この「救いのわざ」〔慈善〕の栄誉を受けるために、喜んでしかも手ぬかりなく戦うようにしましょう。私達一同は、義のための戦いにおいて、それをご覧になっている神と共に、キリストと共に走るようにしましょう。そしてこの世の生活よりも偉大なものとなり始めた私達は、自分の進路をこの世の欲望のゆえに妨げることのないようにしましょう。その日が到来すれば、「報いの日」であれ「迫害の日」であれ、私達はこの慈善の競走の中で、たとえ迅速な者でも、速く走る者でも、私達の功德に主が報いをお与えにならないようなことは、決してないのです。即ち、平和な時には、勝利した私達にその「慈善の働き」の報いとして「真っ白い栄冠」

をお与えになり、迫害の時には、その「情熱」の報いとして「深紅色の栄冠」をお与えになるでしょう。(完)

Summaries

A study of Church Fathers :

S. Caecilius Cyprianus (5)

—The pastoral instructions on manifesting faith
by works and alms—

A translation with notes of St. Cyprian's
De Opere et Eleemosynis.

Kiyoshi YOSHIDA

Cyprian (200-258) became bishop of Carthage about 248, and he had an influential pastoral ministry and produced various writings before his martyrdom in 258. [Some of them, for example, *De Ecclesiae Catholicae Unitate*, *De Lapsis*, and *De Dominica Oratione*, are already translated into Japanese by me, and published in NANZAN JOURNAL OF THEOLOGICAL STUDIES (Cf.No.8,10,11).]

During the Decian persecution(250-251), the Christian society in Africa was covered with calamities and devastations, and many people became poor. Even worse, the rich people oppressed the poor and as a result the poor were obliged to live in extreme poverty.

As soon as Cyprian became aware this severe situation, he wrote *De Opere et Eleemosynis*, (*On Works and Alms*) about 252(in Oxford edition assigned to 254). He exhorts the Christians to manifest their faith strongly by good works and alms to the poor. [I think, this book is also stimulative and useful for our new movement of the solidarity with the poor and the oppressed today, after the Vatican II.]

According to his instructions, our works of justice and mercy are not

only useful and recommendable to all of us, but also necessary practice for our salvation. He explains this important point in 26 chapters, by quoting many words and passages from the Old Testament and the New Testament as well. For example, in chapter 23, quoting the passage of the last judgement of Matthew 25, 31-46, he continues as follows :

What more could Christ declare unto us? How more could He stimulate the works of our righteousness and mercy, than by saying that whatever is given to the needy and poor is given to Himself, and by saying that He is aggrieved unless the needy and poor be supplied? So that he who in the church is not moved by consideration for his brother, may yet be moved by contemplation of Christ ; and he who does not think of his fellow-servant in suffering and in poverty, may yet think of his Lord, who abides in that very man whom he is despising.

In chapter 25, Cyprian invites us to consider the reason why we should do our best for helping the needy and poor, and says what the congregation of believers did in the time of the apostles, when, at the first beginnings, the mind flourished with greater virtues, when the faith of believers burned with a warmth of faith as yet new.

And finally, he concludes that whatever is of God is common in our use ; nor is any one excluded from His benefits and His gifts, so as not to prevent anyone of the whole human race from enjoying equally the divine goodness and liberality. Thus the day equally enlightens, the sun gives radiance, the rain moistens, the wind blows, and the sleep is one to those that sleep, and the splendor of the stars and of the moon is common. In this example of equality, he who, as a possessor in the

earth, shares his returns and his fruits with the fraternity, while he is common and just in his gratuitous bounties, is an imitator of God the Father.